

広い空の下で

目羅 愛

はじめに

私たちの学校には、学校行事というものがほとんどありません。毎年きちんと行う行事といえば、入学式、卒業式、クリスマス会の三つだけです。運動会もお遊戯会も、ありません。前回運動会を行った

のは二、三年前になりますが、それは保護者の方からの提案でした。在籍している一人の子どもが自分の兄弟の運動会を見て、自分も運動会してみたいとお母さんに言ったそうです。その子の気持ちにこたえたいと思い、運動会を行うことにしました。ホール（学校の中心の場所）に簡単な飾りつけをして、

どの子どもも楽しんで参加できるような競技——玉入れ、パン食い競争、つなひき——を準備し、当日「今日は運動会しよう！」と子どもたちを誘って行いました。地味で簡単な運動会ですが、いつもの学校の雰囲気を大きく変えなかったためか、子どもたちは緊張することなく楽しむことができました。

子どもたちのためにイベント的なものを企画する時、私たちが何よりも大切にしたいと思っている点は、一人ひとりの子どもの学校生活そのものです。毎日の子どもの生活があつてこそ、行事のようなちよつと特別な時間が生きてくるような気がします。学校生活に溶け込んでいるような学校行事のあり方が、理想だと思っています。

これから述べる「遠足」も、当然毎年「必ず」行うというわけではありません。遠足はクラスごとに

企画することが多く、クラスの担任が子どもたちの様子に応じて遠足をするかしないか判断しますが、たいていの場合どのクラスも遠足を行っています。遠足を企画する時、一人ひとりの子どもの顔を思い浮かべながら、どの子どもも楽しめるように時期、場所、交通手段、昼食などを担任同士で相談します。「電車やバスに興味をもっている子がいるから

公共の乗り物を使おうか」「いや、水が好きな子がいるから船に乗ってみるのはいかがか」「レストラが騒がしかったりすると食べなくなってしまう子がいるから外食ではなくお弁当に」というように、一日の流れを頭で描きながら、一つひとつつくっていきます。いつもとは違った空間の中で子どもたち。どんな様子になるのか、想像できても実際はわかりません。ただ、特別な活動だからといってすべてを特別にするのではなく、一緒に過ごす人や食べ

るもの、その子どものやりたい遊びなど、いつもと変わりなくできることも実現できるように考慮します。特に、年齢の小さい子どもほどそういう考慮をする必要があると思います。

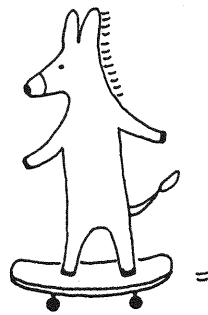
昨年度一・二年生のクラスで夏と秋に行った、二つの遠足の実際の様子についてふれていきます。

七月の遠足：水族館

この一・二年生クラスは新入生を迎えてスタートを切ったクラスです。普段の学校での生活は個々の遊びをしているので、みんなで一緒に何かをすることはあまりありません。新学期が始まって一か月が過ぎた頃から、子ども同士が少しずつ互いに意識を向ける様子がうかがえるようになってきました。ほんやりと輪郭をもち始めようとしているクラスの輪。「みんなと一緒になかをした」というより

も、「みんなと一緒にいた」と思えるような機会をつくりたいと思いました。遠足は絶好のチャンスでした。

前年度の遠足に参加した子どもたちにとって、今回は初めてお母さんと離れての遠足になります。行き先は東京都品川区にある水族館、区営の大きな公園の中にあり、その敷地はとても広いです。そのため子どもたちが自分の居心地の良い場所を求めて、点々ばらばらに散ってしまうのではないかと懸念しました。しかしそれと同時に、それぞれの子どもにとって楽しいことが見つけれられそうな期待をもてま



した。

当日体調を崩して欠席した子どもが多かったので、クラスの半分の人数（四人）での遠足になりました。駅からバスに乗って水族館に到着、イルカショーを目指します。しかし、水族館の照明の暗さで不安になった子は中へは入らず、外のベンチでお弁当を食べることを選びました。中に入ったのは三人、イルカショーを見たのはそのうちの一人だけ。

一人の子は水族館の中を通過しただけで（魚をほとんど見ずに）外へ出て、外のベンチにいる子と一緒に弁当を食べました。もう一人の子は建物の構造やエレベーターに興味をもっているので、水中トンネルをくぐったり建物の中（水族館は二階建て）を探索しました。

そのあとの時間は、水族館を含む公園の敷地の中で、一人ひとりがそれぞれの好きな場所、好きな遊

びを見つけて、思い切り楽しみました。大きな岩場で次々と岩に挑んで頂上を制覇していった子。水族館の反対側には、アスレチックのある小さな遊び場があり、そこまで足を伸ばして遊んだ子。水族館を満喫した後に売店でジュースを買ってゆっくり過ごした子。施設内の探検を終えた子は、近くの信号機を調べに敷地の外へ出かけました。

子どもたち一人ひとりが、いつもと違う場所でも臆することなく、自分らしく遊ぶことができて本当に良かったと思いました。また、広い敷地内で遠くのほうにクラスの仲間を見つけた時に、とても嬉しそうに「おーい」と呼びかけたり、それに応じて「おーい」と呼び返してくれて、二人の間で呼び合う遊びが生まれたりしました。子どもたちの心の中に、一人ではなく仲間と一緒に来ていることがはっきりと意識されていることがわかる場面でした。

十一月の遠足：お台場でバーベキュー

夏休みを終えて二学期になってから、学校生活の中で、大人を介さず子どもたちだけで遊ぶ場面が増えたり、他の子どもの遊びを自分の遊びに取り入れてみるなど、クラスのつながりが強くなっていると感じました。私たちの学校は保護者による送迎なので、保護者同士で話をする機会がたくさんあります。土曜日は授業があるので、お父さんも一緒に学校に来て子どもたちとかかわっていています。担任と子ども、担任と保護者、親と子の関係から、子ども同士、保護者同士、そこに大学などの専門機関から実習に来ている学生も加わり、それぞれの人間関係が広がり始めていました。秋の遠足は、クラスを支えている人たちみんなが参加できて楽しめる遠足にしたいと思い、親子で参加するバーベキュー遠足にしました。もちろん、実習生も。

海に面した横長の公園で、噴水や遊具、いくつもお台場があったりして、またもや広い所です。しかし、子ども同士のつながりが深くなりつつあるというのと、夏の遠足でそれぞれの場所ですれ違った経験があったので、たとえ離れ離れに過ごしたとしても楽しい経験になると信じてことができました。

バーベキュー自体子どもたちはあまり食べませんでした。お父さんやお母さんが楽しそうに過ごしている様子が嬉しくて、遊びに出かけてはバーベキューの所まで戻ってくる子がほとんどでした。お料理が大好きな子のために料理の器具を用意して、その子は丁寧に粉をまぜてチヂミを作ってくれました。

今回の子どもたちの過ごし方は、前回とは異なります、それぞれの好きな場所へ行き好きな遊びをしますが、次第に人のいる場所へ移動して遊んでいました。広場で「はないちもんめ」や「かくれん

「ぼ」をして遊んだり、大好きな実習生と海岸線を散歩したり、友達がいる所を探すことそのものが遊びになっていたり、人とかかわりながら過ごすことを選んでいたように思います。そして、気がついた時にはクラスの仲間が同じ遊具で遊んでいて、たくさん遊んだ後に広場でみんなでアイスクリームを食べました。なんて、幸せな味だったことか！ 遠足から数日後、学校で「パーベキューしたい」という子どもからの提案で、ホットプレートを使って焼きそばを作りました。

子どもたちはお互いに、より強く深く、つながり合っているのだと感じさせられた遠足でした。子どもたちの中に「ともだち」としての意識が、遠足によってよりはっきりと手応えとして感じられたのではないかと思います。また子どもを中心に、子どもたちを支えている大人たちも互いのつながりを発見できたと思います。

おわりに

毎日の生活の中でそれぞれの子どもの好きな遊びや場所は多様なことから、遠足に限ってみんなで一緒に何かをさせようとするのは不自然なことなのだと気づきました。それができるのは、子どもの中から「友だちと一緒に遊びたい」という気持ちが起こって初めて成立するのだと思います。また、水族館やパーベキューに来たものの、子どもたちはそれよりもそれらを取り巻く所で各自の楽しみを見つけていました。水族館やパーベキューが目的ではないから、それで良かったと思います。遠足という特別な考えてしまいがちですが、昨年度の遠足を通じて、意外にも学校生活の延長線上にあるのだと思いました。毎日共に生活をしていくうちに芽生えてきた、子どもたちのつながり合いを改めて感じることができました。

(愛育養護学校)